

兵衛志殿御返事

安元年五月 五七歳

御ふみにかゝれて候上、大式の阿の閣の梨のかたり候は、ぜに十連余れん並びにやうやうの物ども候ひしかども、たうじはのうど農きに時て□□□□人もひきたらぬよし□□□も及び候はざりけ□□□□兵衛志殿の御との□□□□御ふ夫馬まにても□□□□て候よし申候。

夫それ百濟国より日本国に仏法のわたり候ひしは、大船運にのせて此をわたす。今のよど河より近あ江みの水海につけて候ものは、車運にて洛陽へははこび候。それがごとく、たといかまくら鎌に倉いかなる物を人ふにたびて候とも、夫と馬日となくばいかでか□□が命はたすかり候べき。□□□童子は土の餅を昔仏徳に□□□□□阿育大王と□□□□□□□□□□供くやう養しまいらせ候ひしゆへに、阿育大王の第一の大ら臣だい羅提吉きちとなりて一閻浮提後の御うしろめ、所謂大を臣をい殿ごんのたいの御時のふ権大夫殿のごとし。

此は彼等にはにるべくもなき大功德。此の歩馬金は泥こんでい駒こまとなり、此の御との人殿は車しゃの匿くと舎ねりとなりて、仏思になり給ふべしとを召ぼしめすべし。抑そもそもすぎし事なれども、あまりにたう尊とくうれしき事なれば申す。

昔は波羅奈国らにな摩訶羅王こくと申す大王まをはしき。彼の大王ふたりに二の太子ぜんあり。所謂善友太子う・悪友太子ぜんなり。善友太子の如意宝珠盗を持ちてを盗はせしかば、此をとらむがために、をとの悪友太子は兄弟の善友太子の眼じょうをぬき給ひき。昔の大王は今の浄飯王ぼんのう、善友太子は今の釈迦だ仏ぼ、悪友太子は今の提婆だ達た多た此たなり。兄弟なれども、たからをあらそいて、世々生々にかたきとなりて、一人は仏となり、一人は無間地獄だにあり。此は過去の事、他国の事なり。我が朝には一院・さぬきの院は兄弟なりしかども位をあらそいて、ついにかたきとなり給ひて、今に地獄眼にや当をはすらむ。当世目めにあたりて、此の代危のあやを争きも兄弟のあらそいよりを争こる。大将殿と申せし賢人も、九郎判官等の舎弟等をほろぼし給ひて、かへりて我が子ども皆所従等に失はれ給ふは眼前目の事ぞかし。

とのばら二人は上下こそありとも、とのだにもよくふかく、心まがり、道理をだにもしらせ給はずば、右衛門のたいふのさかんどのの大夫志殿たいはいかなる事ありとも、親を勤やの当か許んだうゆるべからず。右衛門の大ふのた親いは法華経を信じて仏親になるとも、親を勤やは法華経の行者なる子損を賢か損んだうして地獄賢に墮つべし。との賢はあにとを賢やとを賢そんずる人になりて、提婆達多賢が賢やうに賢をはすべかりしが、末代なれども、かしこき上、欲なき身賢と生まれて三人ともに仏になり給ひ、ち父かた、は母かた方の類るい救をもすくい給ふ人となり候ぬ。又との殿御子息等もすへの代はさかうべしとを末ぼしめせ。此の事は末一代聖教をも引きて百千まいにかくとも、つくべしとは尽をもわねども、瘦やせ病やまいと申し、身苦もくるしく候へば、事々申さず。あわれあわれ、いつか見げ参さんに入りて申し候はん。又むかい嬉まいらせ候ひぬれば、あまりの嬉うれしさに、語かたられ候はず候へば推あら量あら申す。よろづは心推に量すいしはからせ給へ。女房の御事同じくよろこぶと申させ給へ。恐々謹言。